

令和 5 年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4075600108		
法人名	医療法人志成会禱若宮医院		
事業所名	グループホームやまぶき(1号館)		
所在地	宮若市沼口976-1		
自己評価作成日	令和5年7月30日	評価結果確定日	令和5年9月4日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリズン
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和5年8月24日

家庭的な環境の下で認知症の方の「その人らしい」生活を支援したい という理念の下、地域の方々にも支えていただき、令和5年11月1日には満19年を迎えようとしています。
 母体である禱若宮医院が併設されており、入居者・職員の健康管理、身体状況の変化に対し必要なときに適切な医療を受けることができ、御本人・御家族・職員共々安心感が得られています。
 側に寄り添い安心と尊敬のある生活の中で、併設の医院へ出向き、個々にリハビリテーションを継続することで、身体レベルの低下防止となっています。また、月に2回ほどボランティアの先生が来られ音楽療法を実施していただき、脳の活性化を図っています。
 令和5年6月より玄関ホールでの面会を解禁し、外出・外泊も徐々に解禁されていますが、ご家族や禱若宮医院と連携し、感染予防を継続しています。
 法人の取り組みとして令和4年夏より特定技能制度を利用し、当施設では現在3名の外国人が勤務しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

今秋開所20年を迎えるグループホームやまぶきは、昼礼時の外国籍の職員のゆつくりとした丁寧な唱和は管理者自身が言動を振り返る機会となり、外国籍の職員の丁寧な入居者の暮らしぶりの報告は、家族の漠然とした不安を解消している。センター方式の心身の情報シートに私の不安や苦痛、やりたいことや願い、要望などを整備し、同行や声かけで転倒や熱中症防止に務めながら「草取りがしたい」を叶え、在宅復帰希望はリハビリ職と連携しADL向上を目指している。昨年は3名の方を見取り、家族から「やまぶきで良かった」と謝辞を頂き、家族の「もっと長生きしてほしい」との願いで、敷地内の介護老人保健施設に入所された方もあり、本人らしく最期まで生き、より良い最期を迎えていただけるように支援している。地域恒例の草刈りに法人職員が参加し、退去後も家族から玄関の手指消毒用のグッズの寄付や近々新米の差し入れがあるなど、母体医療法人と一体となったサービスで地域から篤い信頼を得て、穏やかなやさしい時間が流れている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27) ○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21) ○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40) ○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22) ○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12) ○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット／事業所名 1号館／グループホームやまぶき

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者の方々が地域の中でその人らしく暮らし続けることを職員全体で認識し地域の関係性を大切にしている。 昼礼時にホームの理念、ケアの原則を唱和しケアの場を振り返っている。	昼礼時理念などの唱和を継続し、気持ちを切り替えて午後のケアに臨んでいる。技能実習生である外国籍の職員のゆっくりと丁寧な唱和は、自身の言動を振り返る機会となり学ぶことが多いと、管理者は話している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	法人として年に数回ある地域の草刈りに参加させて頂いている。 近隣に住む退所された利用者の御家族が差し入れを持って来訪されることがある。	週末開催される地域恒例の草刈りに新規入職の法人職員が参加予定である。退去後も家族から玄関の手指消毒用のグッズの寄付があったり、近々新米の差し入れがあるなど、母体医療法人と一体となったサービスで、地域から篤い信頼を得ている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人の方針として、コロナ禍のため感染症予防の観点からも積極的な交流に制限があった。令和5年6月より交流の緩和等を行っているが、現在は満足な地域貢献は出来ていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	書面での代替開催としていたが、令和5年6月より事業所内で開催。2ヶ月に1回事業所からの活動報告や研修報告、外部評価の調査報告書等と共に、御家族や行政から様々な意見を頂きホームの運営に活かしている。	全家族に運営推進会議開催を案内し、2~3家族や民生委員、地域包括支援センター職員などの参加で開催している。入居者の暮らしぶりや運営状況を報告し、毎月個別に送付している便りで「ご飯を美味しく食べている」と家族から嬉しい感想を頂いている。会議録は玄関で公表している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に市や地域包括センターの担当職員に参加していただいている。	担当部署から運営推進会議開催に関するアドバイスを受け、6月から通常開催としている。今年度地域同業者協議会GHみやわかの研修担当を務めている管理者は、講師派遣などの協力や連携をお願いしたいと話している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	車椅子から立ち上り動こうとされる利用者の方は見守り、さりげなく寄り添うようにしている 夜間は見守りセンサーを使用、体動を感知し入居者の覚醒状態に合わせたケアを実施している。	法人の身体拘束適正化委員会に管理者が出席し、資料を参考に具体的な身体拘束内容を全職員に周知している。不適切な言動は職員間で注意し合い、玄関アプローチの草取りに行こうとする方の言動を見守り同行するなど、拘束をしないケアを実践している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員間での勉強会を実施し、虐待防止法に関する理解を深めている。 職員同士の言葉使い等に、職員は常に意識を持って丁寧な声掛けを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度についての研修がある場合は出来る限り参加している。重要事項説明書で成年後見制度について説明を行っている。	参加している福岡県高齢者グループホーム協議会主催の後見制度に関するオンライン研修会を受講したり、成年後見制度に関するパンフレットを整備し、入居時や状況に応じて説明しているが、現在は制度の活用はない。	今後はさらに多様な家族構成が予測されるため、成年後見制度とともに日常生活自立支援事業の内容や制度との違いに関する研修を期待します。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族の方々に理解して頂けるように、丁寧に説明を行っている。改定の際には別途書面を用意し説明、同意の署名をいただいている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議では利用者全家族に参加案内を配布し、参加者意見交換を行い、御家族からの要望を受けている。御家族が来訪された際には、職員が必ず声をかけ、さりげなく意見、要望を伺っている。	6月から予約制で玄関で時間や人数を制限した面会をお願いしているが、来訪時に改めて制限事項をお願いする家族もある。管理者は、外国籍の職員の丁寧な入居者の暮らしぶりの報告に不安を解消する家族もあると、話している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人内の定例会議や給食会議に管理者が参加している。昼礼時やミーティングの際の職員の意見を持って行っている。	ユニット毎や全ユニット会議の職員の意見を集約し、管理者が法人の定例会議で報告している。昨今運営体制が変わり、人事異動の影響は大きいですが、古い機器の買い替えが行われ、スマートフォンの活用が検討されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の資格取得に向けた支援を行い、取得後には職場内で活かせるように努めている。60歳を超えても本人の希望に応じて就業を継続することができる		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	採用にあたっては、性別や年齢等の理由に採用の対象から排除しないようにしている。また、事業所の職員として能力が發揮できるようにしている。	外国籍を含む20代～70代の男女の職員が、ハローワークや民間求人サイトで入職し、常勤やパート、契約職員として就労している。希望のシフトや休みの希望が叶い、実践者研修や基礎研修参加を推奨し、人材育成に取り組んでいる。体調不良の職員は隣接する医療機関に直ぐに受診でき、職員は「働くのが楽しい」、「周りに助けてもらっている」と、生き生きと勤務している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	人権教育に関する資料をスタッフに閲覧してもらっている。 利用者を個人として尊重しプライバシーを守り、安心と尊厳のある生活を実現できるように取り組んでいる。	法人で虐待に関する研修を実施し、人権教育や啓発活動に努めている。外国籍職員に対する家族の漠然とした不安解消の機会を設け運営推進会議で報告するなど、入居者だけでなく職員の人権遵守に務めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の勉強会、グループホーム協議会の勉強会(リモートワーク)や外部研修等は積極的な交流に制限はあるが、職員がなるべく受講できるようにしている		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	現在グループホーム協議会の勉強会はりモートワークにて参加、令和5年6月よりGHみやわかの勉強会も2か月に一度の開催となっており、職員が受講し交流出来る様にしている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	そばに寄り添い話を聞くように努力している。信頼して頂けるような関係作りと、居心地の良い環境を整える。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	個々の家族の苦労や、今までのサービスの利用状況、これまでの経緯について聞き、当ホームで出来るサービス内容、家族の要望をしっかり受け止め、関係づくりに努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人や家族の思いを確認し、「今、何が必要なのか」しっかりと見極め、信頼関係を築きながら必要なサービスにつなげるようにしている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	洗濯物たたみ、タオル巻き、もやしの根取りなど、利用者の方々の協力を得て助け合いながら共に暮らす、よき関係づくりを築いている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日々の暮らしの出来事や気づきの情報の共有に心がけ、本人と一緒に支える為により良い関係が出来るよう心掛けている。 毎月1回ホームの請求書と一緒に、職員が書いたお便りを出している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域に暮らすなじみの方が訪問して下さる。継続的な交流が出来るように心がけている。禰若宮医院に出向くことで、在宅時に接していた方と触れ合え、関係が継続している利用者の方もいる。	敷地内のデイケアや介護老人保健施設利用から入居に至ることが多く、受診やリハビリ時に馴染みの方々と挨拶を交わしている。調査日、家族が「皆さんどうぞ」と差し入れ持参で来所したり、孫や曾孫の面会もあった。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	洗濯物たたみやもやしの根取り等のお手伝いやラジオ体操等みんなで楽しく過ごす時間や場面作りを行い、利用者同士の関係がより良いものとなるよう支援している。居室にて過ごされる利用者には訪室し声掛けしている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の事業所へ移動された場合、移動先の関係者に情報提供を行い、暮らしの継続性が損なわれないよう努めている。また時々はこちらから出向き、声を掛けるようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で訴えを汲み取り、よい関係になれるよう努めている。表情や会話の中からも小さな訴えを聞き逃さないようにしている。意思疎通が困難な方には家族や関係者から情報を得るようにしている。	センター方式の心身の情報シートに私の不安や苦痛、かかわり方についての願いや要望、私が嬉しいこと、快と感じていること、やりたいことや願い・要望を整備し、介護計画に活かしている。	情報シートに日々の関りで得た情報を印字を変えて追記したり、当該シートを活用して家族と心身の状況を共有し、さらなる思いや意向の把握を期待します。
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居相談時に、家族からの聞き取りの中でその方の生活歴、暮らし方を職員が周知しケアに生かしている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの側に寄り添い、その人の全体を把握し行動や細かい言動を見逃さずしっかり受けとめ現状の把握に努めている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の希望や意向を把握し、その人らしい暮らしの継続ができるように、チーム全体で介護計画を作成している。	本人の意向を明記した介護計画を作成し、日々の身体及びADL状況の記録に沿って、短期目標をモニタリングしている。同行や声かけで転倒や熱中症防止に務めながら「草取りがしたい」を叶え、在宅復帰希望はリハビリ職と連携しADL向上を目指している。	現状や想定されるリスクを職員や家族などと共有しながら、より具体的な短期目標設定やその期間、日々のケアの実践を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別に、食事・水分量・排泄等・受診及び身体状況、本人の言葉を記録している。職員の気づきや状態変化、ケアの統一を行い、職員間の情報共有を実施している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	隣接する医院で個別にリハビリテーションを受けられる為、職員は時間帯を把握しながら送迎を行っている。利用者や家族の日々変化する状況や要望に応じるよう努めている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の方がボランティアで月2回音楽療法に来て下さっている。利用者は懐かしい歌に感激されている。口腔体操も並行して行い、嚥下機能低下防止に役立っている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	代表者が法人の医師であり、医院が隣接されている為、急な体調変化に対応でき、利用者や家族から安心感が得られている。	外来看護師と連携し、隣接する母体医療機関の受診やリハビリを支援したり、敷地内の介護老人保健施設の師長に夜間帯でも何かあれば連絡するなど、密な連携で適切な医療を支援している。訪問歯科による口腔ケアを日頃のケアに活かしている。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	隣接の医院の外来看護師とは顔なじみの関係で、受診時には些細な気づきに対しても報告し、相談にのっていただいている。医療連携体制を含め利用者の健康管理や医療面で、助言・対応を行ってもらっている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には本人への支援方法に関する情報を医療機関に提供し早期の退院に向けて協力をお願いしている。家族と共に回復状況の情報交換をしながら速やかな退院支援に心掛けている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人家族の意向により職員が連携をとり、安心して納得した最期を迎えられるように医師の説明を聞いていただき、合意形成を行っている。	昨年は3名の方を看取り、家族から「やまぶきで良かった」と謝辞を頂いている。家族の「もっと長生きしてほしい」との願いで、敷地内の介護保健施設に入所された方もある。今後も家族や主治医との話し合いを重ね、本人らしく最期まで生き、より良い最期を迎えていただけるように支援する予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	機会ある毎に、勉強会に参加し、最寄の消防署よりの心肺蘇生、AEDの講習も開催あれば受けている。新規職員(外国人職員も含む)も増えて来たため、利用者の急変時の対応手順を簡単なフローチャートとして作成し、迅速に判断出来るように心掛けている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域全体の災害については、リスト一口若宮を避難場所に行っている。敏速な誘導を行い安全に避難できるよう半年に1回訓練を行っている。飲料水や食料を確保している。	夜間想定を含め年2回、緊急システムの稼働の有無の確認や消防署への通報訓練を実施している。今夏の大雨による敷地内施設の停電は、対策を検討する機会となった。法人としてBCPを策定し、ホーム独自の備蓄を一覧表で管理している。	法人として策定されたBCPを基本としたホーム独自のBCP策定とともに、BCPに関する研修やシミュレーションなどを期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの個別性を大切に、職員は相手の身になって考え、行動し、言葉掛けに配慮している。	「〇〇さん」と呼称し、やさしい気持ちや顔、言葉でゆっくりとした対応に務めている。昼食後テーブルの上のお膳を拭く入居者や傍で静かに業務を担う職員の後ろ姿は穏やかで、ゆっくりと優しい時間が流れていた。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員が一方的に決定するのではなく、そばに寄り添いながら本人の訴えや表情を読み取り、自己決定が出来るよう働きかけている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースに合わせたケアを心がけている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人のこだわりのある(色)上着・ズボンを把握し、その人が満足できる支援を行っている。ビューティヘルパーさんに本人の好みに合わせたカットをお願いしている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の能力を活かし一人ひとりのペースで食事が楽しめるように食器やセッティング方法を工夫している。食事制限や食事形態の必要な方には、見た目も美味しくなるよう盛り付けも工夫している。	食事が美味しいとの評判で入居された方もあるほどで、器や彩の工夫を凝らしたセッティングの昼食は、調査員も思わず「まあきれい」となった。食材は業者搬入であるが食材やお米の差し入れもあり、楽しみながらゆっくりと夫々のペースで完食している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分量を個別にチェックしている。食事形態も常食・荒キザミ・ミキサー食・高カロリー補食など、個別に食事の支援を行っている。利用者の覚醒状態等にあわせ、時間にとらわれずに食事介助を行っている。御家族より好物を差し入れていただいている利用者もいる。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行い、夕食後は義歯の洗浄剤で消毒を行っている。歯科往診の方には歯科よりブラッシングの指導を受けている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンをチェックし、その人に合わせたトイレ誘導を行っている。オムツ着用の利用者でも排便間隔が開いている場合にはトイレ誘導し、腹部マッサージを行い排便を促している。	夜間はポータブルトイレや本人の希望でリハビリパンツ使用もあるが、日中はトイレでの排泄を支援している。試験外泊時、夜間トイレで転倒した入居者があり、車イスからの立ち上がりや排泄に関する一連の行為をリハビリ職員と検討している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の利用者には軽度な運動と水分摂取や、食材等を工夫している。朝食後に排泄の声掛けを行っている。トイレに座られた際には腹部マッサージ等を行い、なるべく薬に頼らないよう心掛けている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	希望であれば、なるべく入浴できるようにしている。湯の温度も個人に合わせてゆっくりと入浴を楽しんでもらえるよう支援している。	「肩まで浸かりたい」とリフトの使用はなく、車イスの方も希望があれば職員2人体制で浴槽に浸かっている。週2~3回を目途に、家族持参の好みのボディソープを使用したり、自分で洗身できる方は最期にゆっくりと楽しんでもらっている。入浴拒否の際は「明日入りましょう」と受け止め、機嫌の良い時間を見計らった声かけで入浴を支援している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりのリズムに合わせて、休息が出来るよう支援している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の処方変更等があった場合は、服薬後の状態を記録し、主治医に報告するようにしている。処方内容は個別に内服薬と共に保管している。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物干しやたたみ、タオル巻き、お盆拭き、もやしの根取りなど、その方の力を発揮してもらえるようお願いしている。そして感謝の言葉をしっかり伝えるように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	令和5年6月より外出、外泊が緩和されている。散歩やドライブ等の機会を作り、外出している。また、敷地内の季節の草花を見に出かけている。 御家族の協力の元、在宅復帰へ向けて外泊を試みている利用者もいる。	コロナ禍に配慮し、ドライブで車窓から花見をしたり、玄関までのアプローチの左右に植えられた木々や野百合を眺めながら受診したり、ホーム周辺の散歩で気分転換を図っている。コロナ収束の折には宗像大社の菊花展に出かけたいと、管理者は話している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	以前は少額の現金を所持されている利用者がいたが、現在、現金を所持している利用者はいない。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自ら電話をしたいと訴えられる利用者はいないが、御家族からの電話や、職員が御家族へ電話する際には利用者にも代わっていただいている。電話で話される時は話しやすいように椅子をセッティングしている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅と変わらない生活感や季節感を取り入れ、穏やかなときの流れを感じ、より居心地のよい空間となるよう工夫している。	広く明るい玄関は家族との面会の場となり、正面の事務室の左右に各ユニットが開所している。居間からボランティアによる音楽療法や食前の口腔体操のかけ声が聞こえてくる。昼食後はソファから食卓用のイスに両足を伸ばして午睡をしたり、定位置で寛ぐ入居者の姿から、その人らしい穏やかな暮らしが伺える。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関ロビーや廊下、リビングにソファが置いてあり、利用者や家族などが心地よく過ごしていただける空間を作っている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	愛用の家具やテレビ、花鉢を持ち込まれている。御家族の協力を得、家で暮らしていた時と同じ空間を作ってもらっている。	車椅子利用者の目線に合わせて氏名を大きく掲示した居室もある。整理整頓された清潔な居室には洗面台やクローゼットやベット、テーブル、椅子が備えられ、家具や冷蔵庫等の持ち込みもある。壁面には自作品や職員の作品等が飾られ、居心地良い空間となっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの出来ること、わかることを見極め、困らない様、またプライドを傷つけないよう配慮している。		